

U021-01

会場:304

時間:5月24日 08:30-08:55

2009年ラクイラの地震と実用的地震予測に関する国際委員会 L'Aquila earthquake in 2009 and the international commission on operational earthquake forecast

山岡 耕春^{1*}

Koshun Yamaoka^{1*}

¹ 名古屋大学環境学研究科

¹ Nagoya University

2009年4月6日、ラクイラの近郊で Mw6.3 の地震が発生した。死者は約 300 人、負傷者は 1500 人、家屋の損壊は 20,000 棟にのぼる被害となり、65,000 人が避難を余儀なくされた。この地震を受けて、イタリア政府は地震予測に関する国際委員会を組織した。委員会の報告書によると、この地震には、2009年1月から有感地震を含む前震が観測され、地元も不安も高まっていた。そんな折りに、ラクイラ在住の技術者が大気中のラドン濃度のデータをもとに、「地震予知情報」を発表し、市民やマスコミを巻き込んで大きな騒動となった。イタリアの火山地球物理学研究所 (INGV) や市民防災局 (Department of Civil Protection = DPC) は、「現時点では地震の予知は困難である」火消しに務め、3月31日に DPC の招集した災害対応の委員会では「これらの小規模な地震が大地震の前兆であると断言できるだけの証拠はない」と結論した。しかし、4月5日にはマグニチュード 3.9 の地震が発生し、4月6日の本震を迎えてしまった。

国際委員会は、DPS の要請により組織され、現在の科学レベルにおける地震予知や予測の現状、およびそれがどの程度実用的に利用できるかについて、各国の状況をふくめて報告することにし、本委員会には日本からは講演者が参加した。委員会は地震予知・予測の科学的現状についてまとめるとともに、地震が発生する国における実用的地震予測について調査した。2009年10月2日に DPC に対し、勧告を提出した。さらに詳細なフルレポートが 2010年12月に DPC に提出された。勧告は確率的地震予測の必要性、モニタリングの重要性、地震予知の可能性など科学的側面を中心に述べられ、最後に予測の活用や地震情報の伝達についても触れている。確率による予測評価は伝わりにくいと評判は良くないが、地震予知・予測の現状や実力を評価する客観的な尺度として意義があり、過剰な期待によるトラブルを防ぐための非常によい指標になると考える。なお、本委員会によるフルレポートは学術雑誌に投稿される予定である。

キーワード: 地震予知, 予知情報, 勧告, イタリア

Keywords: earthquake prediction, prediction information, recommendation, Italy